

国道431号線バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

八色谷古墳群

年3月

育委員会

国道431号線バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

八 色 谷 古 墳 群

1993年3月

鳥根県教育委員会



八色谷古墳群全景（北方から和久羅山方面を望む）



4号墳全景

序

島根県では国道431号線の交通量の増大に伴い、松江市西川津町から本庄町の間バイパスの建設を計画しました。これを受けて昭和48年には島根県教育委員会によって建設予定地内の遺跡分布調査が実施されました。この分布調査からすでに10年が経過し、この間いくつかの遺跡については発掘調査が完了しております。

今年度は、この一環として松江市上東川津町にある八色谷古墳群の発掘調査を行いました。

この古墳群がある松江市西川津町から上東川津町にかけての一带は、国指定史跡金崎古墳群をはじめ大小の古墳が密集していることで知られていますが、その内容が明らかにされた古墳はごく一部にとどまっています。そうした状況にあって、八色谷古墳群は比較的小規模な古墳ではありますが、この地域の古墳時代を解き明かすうえで重要な資料を与えてくれたと言えます。

本書はこの発掘調査の結果をまとめたものであります。

この報告書が多少なりとも埋蔵文化財に対する理解に役立てば幸いです。

発掘調査にあたりましては、各方面からの多くのご支援、ご協力をいただきましたことに、衷心よりお礼を申し上げます。

平成5年3月

島根県教育委員会

教育長 坂本和男



例 言

1. 本書は、県土木部の委託を受けて、島根県教育委員会が平成4年度に実施した国道431号バイパス建設予定地内の発掘調査報告書である。
2. 調査組織は次のとおりである。
 - 調査主体 島根県教育委員会
 - 事務局 日次理雄（文化課長） 山根成二（同課長補佐）
勝部昭（島根県埋蔵文化財調査センター長） 久家儀夫（文化課課長補佐）
工藤直樹（調整企画係主事） 田部利夫（島根県教育文化財嘱託）
 - 調査員 内田律雄（調査4係長） 柳浦俊一（同主事） 守岡正司（同主事）
石谷二郎（調査補助員）
 - 調査指導 山本清（島根県文化財保護審議会会長）
渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）
菱田哲郎（京都府立大学文学部講師）
 - 調査協力 水口晶郎（島根大学学生）
 - 遺物整理 若佐裕子 津森眞弓 正井るみ子 釘育和子
3. 挿图中の方位は磁北を指し、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向より7°12' 西を示す。
4. 本書第2図の「周辺の地形図」は島根県教育委員会が(株)エイトコンサルタントに委託し作成した200分1の縮図を、第1図の「周辺の遺跡」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。
5. 掲載図面は柳浦、守岡、石谷が作成し、津森、正井が浄書した。
6. 本書の執筆は、調査指導の諸先生の助言を得て、柳浦、守岡がたった。
7. 遺物の実測は柳浦があたり、遺物写真は柳浦、守岡が撮影した。
8. 本書の編集は、柳浦、守岡が協議してこれを行った。
9. 出土遺物、実測図及び写真は島根県教育委員会（島根県埋蔵文化財調査センター）に保管してある。
10. なお、八色谷1号墳は文化庁発行の『全国遺跡地図（島根県）』（1978年）や島根県教育委員会発行の『島根県遺跡地図Ⅰ』（1987年）では川津12号墳、松江市教育委員会発行の『松江市の埋蔵文化財』（1980）や『松江市遺跡地図』（1991年）では川津11号墳としているが、今回、発見者である山本清先生から川津11号墳であるという助言を得た。

目 次

1 調査に至る経緯	1
2 遺跡の位置と歴史的環境	2
3 調査の経過と概要	4
4 検出遺構と遺物	12
(1) 1号墳	13
(2) 2号墳	18
(3) 3号墳	18
(4) 4号墳	18
(5) 1号墳・4号墳盛土内の遺物	31
5 小結	32

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	3
第2図 八色谷古墳群周辺の地形測量図	5~6
第3図 八色谷1・2・3・4号墳地形測量図(発掘前の状況)	7~8
第4図 八色谷1・2・3・4号墳地形測量図(発掘後の状況)	9~10
第5図 八色谷1号墳墳丘測量図	12
第6図 八色谷1号墳墳丘測量図(盛土除去後)	13
第7図 八色谷1号墳墳丘土層図	14
第8図 八色谷1号墳主体部実測図	15
第9図 八色谷1号墳主体部出土玉、須恵器	16
第10図 八色谷2・3号墳地形測量図	17
第11図 八色谷4号墳墳丘測量図	19
第12図 八色谷4号墳墳丘測量図(盛土除去後)	20
第13図 八色谷4号墳墳丘上層図	21~22
第14図 八色谷4号墳葺石断面図	23
第15図 八色谷4号墳葺石実測図	24
第16図 八色谷4号墳主体部実測図	26

第17図	八色谷4号墳主体部土層図	27
第18図	八色谷4号墳周溝内遺物出土状態実測図	28
第19図	八色谷4号墳周溝内遺物出土状態(土師器高環)実測図	28
第20図	八色谷4号墳周溝内山土須恵器、土師器	29
第21図	八色谷4号墳周溝内遺物出土状態(須恵器)実測図	30
第22図	墳丘盛土内出土の遺物	31

図 版 目 次

図版1-1	八色谷古墳群遠景(北方上空から和久羅山方面を望む)
1-2	八色谷古墳群遠景(西方上空から)
図版2-1	八色谷古墳群遠景(東から)
2-2	八色谷古墳群遠景(西から)
図版3-1	1号墳調査前の状況(南から)
3-2	1号墳表土除去後の状況
図版4-1	1号墳全景(南から)
4-2	1号墳主体部棺内第1層除去後の状況(南から)
図版5-1	1号墳主体部土層堆積状況
5-2	1号墳須恵器壘出土状況
図版6-1	1号墳須恵器壘出土状況(北から)
6-2	1号墳主体部(棺)検出状況
6-3	1号墳墓壇検出状況
図版7-1	1号墳墳丘上層堆積状況(東西方向)
7-2	1号墳墳丘上層堆積状況(南北方向)
図版8-1	1号墳盛土除去後の状況(北から)
8-2	2・3号墳調査前の状況
図版9-1	2・3号墳調査後の状況
9-2	2号墳墳丘完掘後の状況
図版10-1	2号墳墳頂部石材出土状況
10-2	3号墳発掘後の状況
図版11-1	2・3号墳全景(調査後)
11-2	2・3号墳調査風景
図版12-1	4号墳二次堆積土除去後の状況(北から)
12-2	4号墳全景(北西から)

- 図版13-1 4号墳全景（北東から）
 13-2 4号墳全景
- 図版14-1 4号墳葺石検出状況（A面）
 14-2 4号墳A面の葺石（西から）
- 図版15-1 4号墳葺石検出状況（B・C面）
 15-2 4号墳葺石（A面左からa、b、c列）
- 図版16-1 4号墳葺石（B面左からc、d、e、f、g列）
 16-2 4号墳葺石（C面左からb、d、e、f列）
- 図版17-1 4号墳葺石細部と墳裾の土層（A面c列）
 17-2 4号墳葺石細部と墳裾の土層（B面c列）
- 図版18-1 4号墳主体部（棺）検出状況
 18-2 4号墳墓壇検出状況
- 図版19-1 4号墳主体部上層堆積状況（南北方向）
 19-2 4号墳主体部上層堆積状況（東西方向）
- 図版20-1 4号墳東周溝
 20-2 4号墳北周溝
- 図版21-1 4号墳東周溝内土層堆積状況
 21-2 4号墳北周溝内土層堆積状況
- 図版22-1 4号墳須恵器壺出土状況
 22-2 4号墳須恵器子持甕出土状況
- 図版23-1 4号墳土師器高环出土状況
 23-2 4号墳須恵器甕出土状況
- 図版24-1 4号墳墳丘土層堆積状況（東西方向）
 24-2 4号墳墳丘土層堆積状況（南北方向）
- 図版25-1 4号墳墳裾の上層堆積状況（東墳裾）
 25-2 4号墳墳裾の上層堆積状況（西墳裾）
- 図版26-1 4号墳黒色土（第56層）分布範囲
 26-2 4号墳地山整形の状況
- 図版27-1 4号墳地山整形の状況（西から）
 27-2 4号墳発掘調査風景
- 図版28 1・4号墳山上遺物
- 図版29 4号墳出土遺物
- 図版30-1 4号墳出土土器細部（上・子持甕子壺接合部分 下・高环接合部分）
 30-2 1・4号墳墳丘山上遺物

1. 調査に至る経緯

八色谷古墳群は川津12号墳として古くから知られた古墳群である。この古墳群の北に位置する国道431号線は昭和40年代後半から交通量が増大しはじめ、現在では県内有数の渋滞路線となっている。鳥取県ではこの対策として松江市西川津町-本庄間道のバイパス計画を立案した。バイパスの路線決定に先立ち、鳥取県教育委員会では松江土木建築事務所から依頼を受けて分布調査を行った。この分布調査では26カ所の遺跡が確認され、これをもとに鳥取県土木部道路課、松江土木建築事務所と鳥取県教育委員会は協議を行い、遺跡をできるだけ保存する方向で道路建設予定地が選定された。

発掘調査は鳥取県教育委員会によって昭和51年から断続的に行われ、今年度は4回目の発掘調査にあたる。今年度の調査は松江市上東川津町大字曾田所在の八色谷古墳群の発掘調査を行った。八色谷古墳群は最初に述べたとおり、川津12号墳として県の遺跡台帳に登録されているが、「川津」の名称が広い範囲で呼称されていること、この地が通称「八色谷」と呼ばれることから「八色谷古墳群」と改称された。本調査に先立って平成3年度に立木伐開後予備調査が行われ、この丘陵には3基の古墳で構成される古墳群があることが確認された。この予備調査では建設予定地内にトレンチを8カ所入れて遺構・遺物の広がりを確認した。その結果、建設予定地の北側の大半は畑の開墾によって大きく掘削されていることがわかり、本調査は南側の古墳群とその周辺に限定された。

以上の経緯を経て、八色谷古墳群では平成4年6月3日から発掘調査をはじめ同9月25日に現地でのすべての作業を終了した。

なお、今回の発掘調査で松江市西川津町から同上東川津町までの国道431号線バイパス建設予定地内にある埋蔵文化財の調査は終了したことになる。これまでに行われた発掘調査は以下に示すとおりである。

昭和51年度 橋本遺跡 柴遺跡 中頭遺跡⁽¹⁾
昭和56年度 柴遺跡⁽²⁾
昭和62年度 祖子分長池古墳 祖子分胡麻畑遺跡⁽³⁾
平成4年度 八色谷古墳群

注

1. 鳥取県文化財愛護協会「主要地方道松江-境港線バイパス関係埋蔵文化財調査報告」Ⅰ 1976年
2. 鳥取県教育委員会「主要地方道松江-境港線バイパス関係埋蔵文化財調査報告」Ⅱ 1982年
3. 鳥取県教育委員会「祖子分長池古墳」1988年

2. 遺跡の位置と歴史的環境

八谷谷古墳群は松江市上東川津町曾田に所在する7基の方墳からなる古墳群である。古墳の多くが一辺約10mの規模で、これらは川津・持田平野に突き出した丘陵上に立地している。

川津・持田平野は松江市街の北東に位置し、八東郡鹿島町の講武平野や松江市南部の意宇平野とならびかなりまとまった耕地面積をもった平野である。縁辺には八手状に派生した細長い丘陵がいくつもあり、これらの丘陵上には古墳が点々と築かれている。この地は奈良時代においては出雲国府から隠岐国に至る幹線道路があったとされ、日本海に抜けるルートとして古代では交通の要衝になっていたと考えられる。

この地域は生活に適した平野や丘陵に恵まれ、古代の遺跡が多く分布しており県内でも遺跡の密集した所である。現在知られる遺跡のほとんどは小古墳であるが、近年縄文から弥生時代の遺跡や古墳時代の集落遺跡なども発見されている。

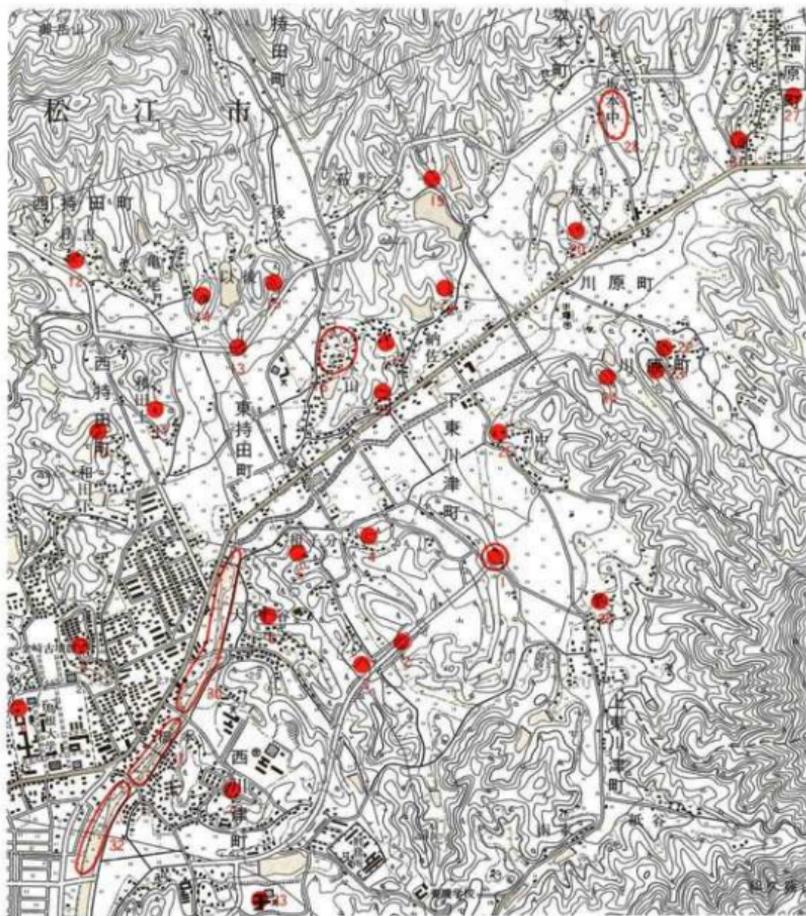
この周辺では明確な旧石器時代の遺跡はまだ発見されていないが、西川津遺跡から尖頭器が出土しており、少なくとも縄文時代早期にはこの地に人が住んでいたことがわかる。

八谷谷古墳群の北西にある西川津遺跡では縄文時代早期末以降、長期間にわたり人々が住んでいたと思われ、多量の土器が出土した。とくに前期初頭と晩期の時期の土器が多く、このころ定住的な集落があったことを窺うことができる。

弥生時代になると引き続き西川津遺跡で集落が形成されているが、金崎遺跡では突帯文土器が出土しているのでこの時代には川津地区の各地で集落が営まれていたかもしれない。西川津遺跡、タテチョウ遺跡の調査をみると、穴道湖は時代によって拡張、縮小を繰り返していたようで、西川津遺跡で多量のヤマトシジミを食用としていることから考えると弥生時代には穴道湖の汀線はかなり奥まで入っていたようである。

西川津遺跡、タテチョウ遺跡で弥生時代から古墳時代前期までの豊富な遺物が出土しているにもかかわらず、川津地区ではこれ以外の弥生時代の遺跡はほとんど確認されていない。特に弥生時代の墳墓や前期古墳はほとんどなく、わずかに道仙古墳群で前期の小古墳が知られるにすぎない。典型的な竪穴式石室や前方後円(方)墳は今のところ発見されておらず、この地区の古墳の多くは中期以降の築造である。

中期古墳は一辺10m前後の小規模な方墳が2～3基群集しているものが多く、比較的規模の大きいものとしては金崎1号墳(前方後方墳 35m)、太源1号墳(円墳 30m)、宮垣1号墳(円墳 30m)、中尾古墳(方墳 21m)が知られている程度である。このうち、金崎1号墳は竪穴式石室



- | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|-------------|
| 1. 八色谷古墳群 | 2. 根子分長池古墳 | 3. 一の谷古墳 | 4. 前田古墳 | 5. 貝崎古墳群 |
| 6. 住吉神社裏古墳 | 7. 柴古墳群 | 8. 薬師山古墳 | 9. 金崎古墳群 | 10. 宮塚古墳群 |
| 11. 太源古墳群 | 12. 日吉塚の内古墳 | 13. 小丸山古墳群 | 14. 松の前古墳群 | 15. 城の越横穴墓群 |
| 16. 太田古墳群 | 17. 道仙古墳群 | 18. 原の空古墳 | 19. 常盤古墳 | 20. 薄井原古墳群 |
| 21. 山根古墳 | 22. 兜神古墳 | 23. 後谷古墳群 | 24. 小松谷古墳 | 25. 中尾古墳群 |
| 26. 西宗寺古墳 | 27. 芝原遺跡 | 28. 坂本中遺跡 | 29. 納佐遺跡 | 30. 西川津遺跡 |
| 31. 原の前遺跡 | 32. タテチョウ遺跡 | 33. 堤廻遺跡 | | |

第1図 周辺の遺跡（国土地理院 25,000分の1）

(竪穴系横口式石室の可能性もある)を主体部とし、鏡、玉類、装飾付須恵器など豊かな遺物が出土しており国の史跡に指定されている。

この時期の集落遺跡としては堤廻遺跡が知られている。堤廻遺跡は18棟の住居跡からなり、前期から中期の土師器を中心に多量の土師器とⅠ～Ⅲ期の須恵器が出土している。集落遺跡でⅠ期の須恵器をこれほど多く出土したものは県内では他になく、また、若干の玉の木製品や滑石製の白玉など祭祀的なものも出土している。

後期古墳としては薄井原古墳がある。この古墳は全長50mを測る前方後方墳で川津・持田平野では最大の古墳である。横穴式石室二つを内部主体とし、山雲地方では比較的古式の横穴式石室と考えられる。また、やや時代が下がるが太田古墳群など石棺式石室を主体部とする古墳が多く分布している。そのほか、城の越横穴墓群などの横穴墓も作られるようになる。

律令時代になると、『出雲国風土記』によればこの地域は島根郡山口郷に属していたと考えられ、川津・持田平野には冬里制が施されていた。八色谷古墳群の南東にそびえる巖山には烽が置かれており、奈良時代においては交通および政治的に重要な地域であったと思われる。『島根郡』の郡家はその比定に諸説あるが、松江市福原町芝原遺跡で規格性をもった大規模な掘立柱建物が検出され陶瓦、墨書土器などが出土していることからこの遺跡が『島根郡家』である可能性は高い。

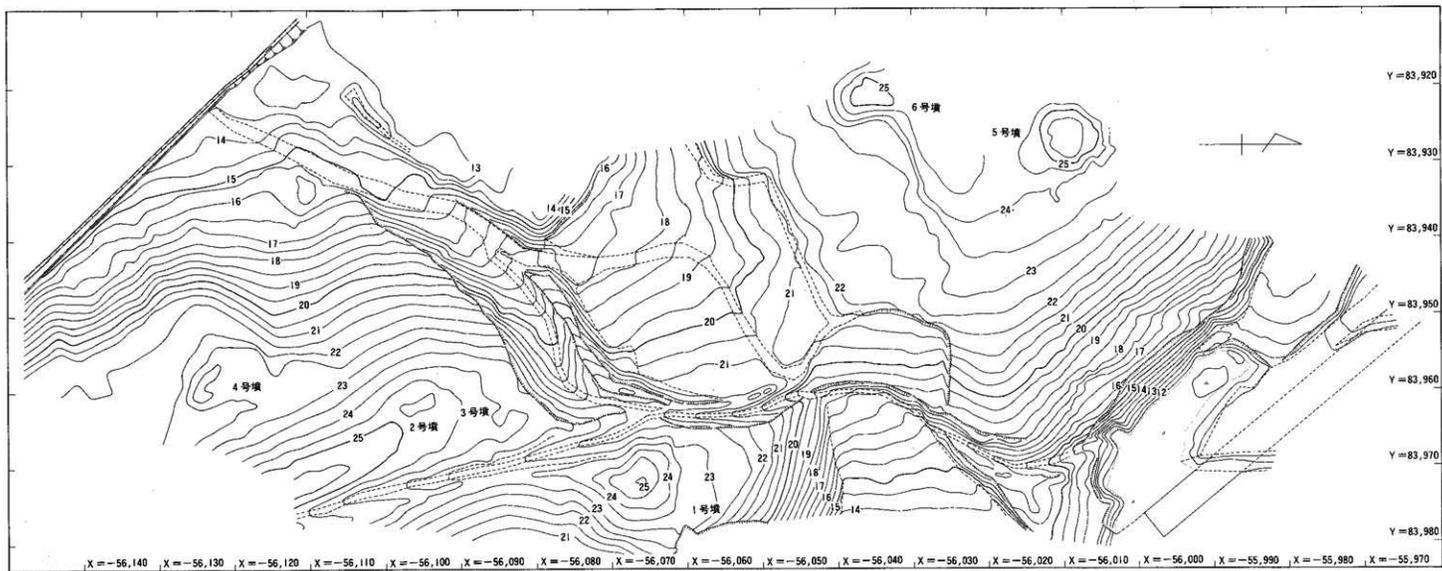
参考文献

- 島根県教育委員会『朝酌川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 1987年
- 島根県教育委員会『朝酌川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅳ 1988年
- 島根県教育委員会『朝酌川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 1990年
- 岡崎雄二郎『松江・道仙古墳群』『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅹ 1983年
- 松江市教育委員会『史跡金崎古墳群』 1978年
- 片岡詩子・今岡徳・内田律雄・松本岩雄・曳野律夫「太原1号墳の測量調査」『島根考古学会誌』3 1986年
- 島根大学考古学研究会『曾田考古』15号 1979年
- 松江市教育委員会『堤廻遺跡』 1986年
- 島根県教育委員会『薄井原古墳調査報告』 1962年
- 松江市教育委員会『芝原遺跡』 1989年

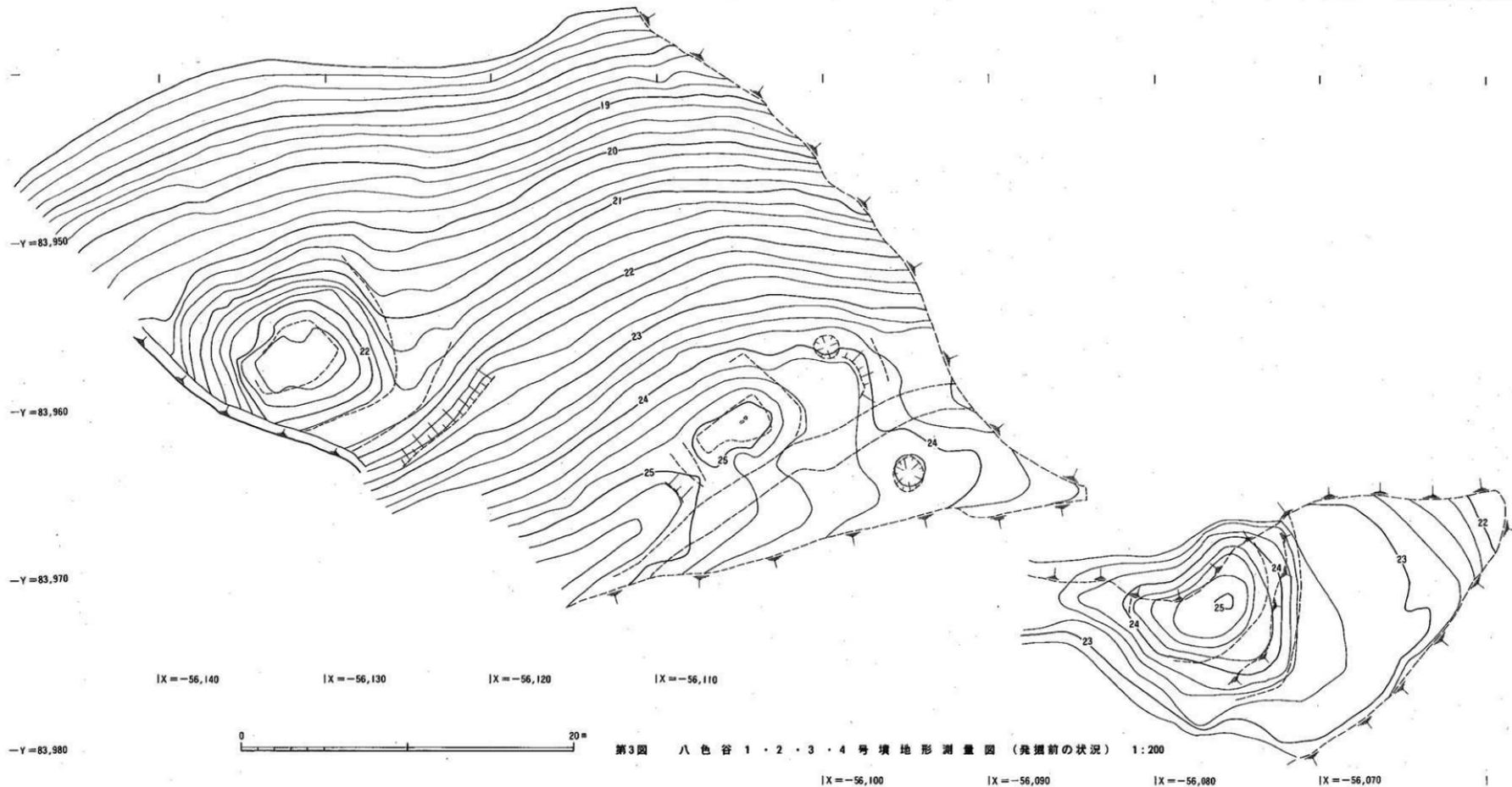
3. 調査の経過と概要

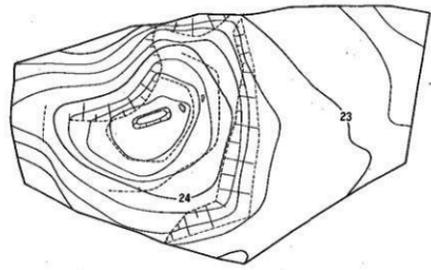
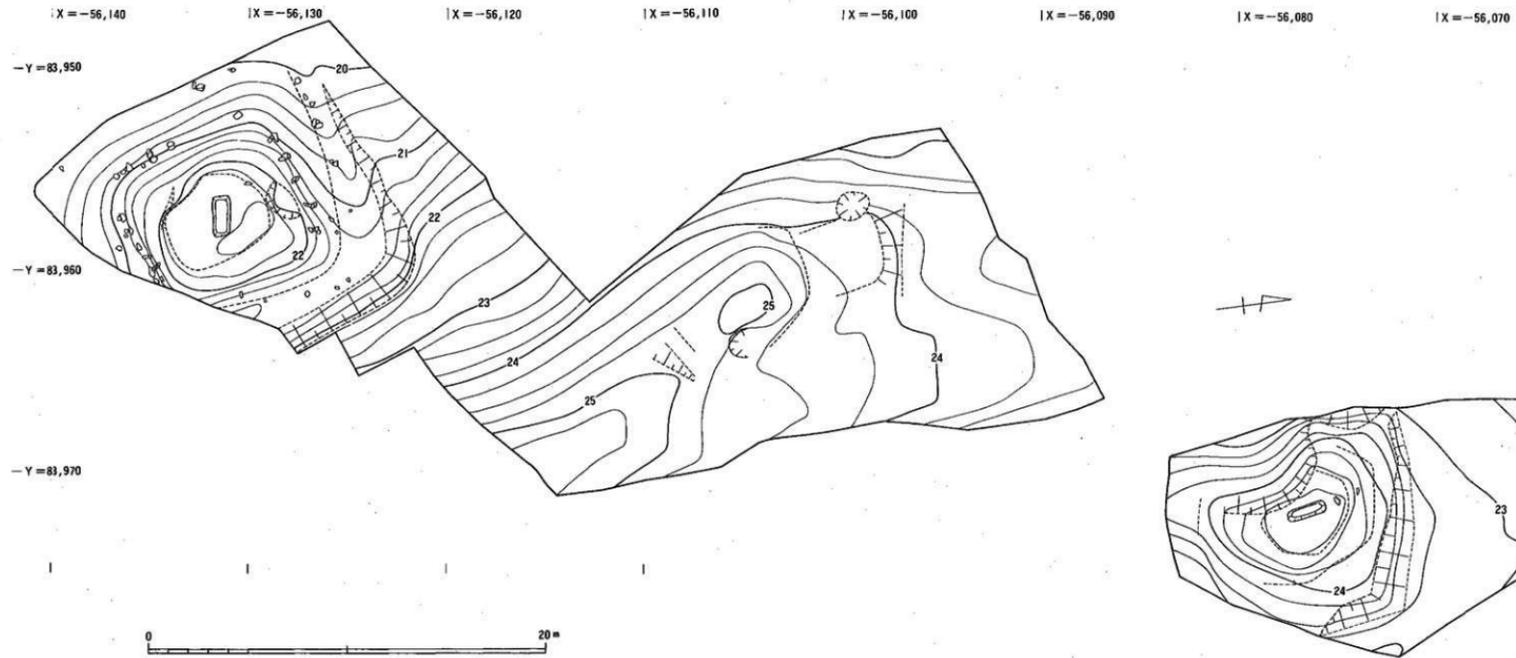
今年度は、松江市上東川津町大字曾田所在の八色谷古墳群のうち1～4号墳の調査を行った。調査期間は1992(平成4)年6月3日から9月25日までの約3ヶ月である。

調査はまず1～3号墳について、100分の1の縮尺で現状での地形測量図を作成することから始



第2図 八色谷古墳群周辺の地形測量図 1:500





第4図 八色谷1・2・3・4号墳地形測量図(発掘後の状況) 1:200

めた。4号墳については、昨年度の予備調査で大量の土砂が二次的に堆積していることが確認されたため、二次堆積土を除去した後に測量を行うことにした。

分布調査、予備調査ではここには3基の古墳が確認されていたが、地形測量の結果2号墳の北側および1号墳と2号墳の中間に平坦面があることがわかった。これは人工的な平坦面と思われたことから上墳墓などの無墳丘墓の可能性が考えられたため、前者を3号墳、後者を5号墳とした。また、1号墳の規模は、一見一辺10m、高さ2mの大きさに見えるが、畑の開墾や山道による掘削で本来の地形が大きく改変されており、実際には一辺8m、高さ1.5mのごく小規模な古墳であることがわかった。

地形測量後、2・3・5号墳から表土の掘削を開始したところ、丘陵頂部は表土は非常にうすく約10cmで地山に達した。この時点であらためて地表の観察を行ったが、人工的な地山の加工が認められたのは2・3号墳だけで、5号墳とした地点は自然の地形であることが判明した。その後、調査の重点を2・3号墳の主体部を探すことに移したが、何度も精査を繰り返したにもかかわらず主体部を検出するに至らなかった。

1号墳も表土は非常にうすく、約10cmで盛土上面に達した。盛土検出後、墳丘頂部で主体部の検出に努めたが、盛土上面ではプランの確認は困難であった。そのため、墳丘にトレンチを設定して掘ったところ、主体部が検出された。主体部は盛土のヒから掘り込まれているが、盛土はあまり厚くなく墓室は地山を掘り込んでいた。なお、盛土内から弥生時代後期の土器が出土した。

4号墳は二次堆積土に埋没していることが予備調査で確認されたが、その後の聞き取り調査では昭和30年代にはこの堆積土はなかったが、その後両側に隣接する畑を作る際に余分な土砂をここに置いたことがわかった。そのため最初に二次堆積土を重機で除去したところ残存状態の良い方墳が検出された。調査の結果、この古墳は墳丘が大部分盛土によって作られており、墳丘斜面にはまばらに葺石があることが確認された。この葺石は等高線に直交する直線状の石列が一つの面に6～7列配された、特異な葺石である。主体部は平面での精査、トレンチによる断面観察でもわかりにくく、墳丘頂部をかなり掘削した時点で墓壇底部がやっと検出できた。主体部検出後は盛土をすべて除去し、地山面の状況を観察した。この観察によると地山は傾斜があるものの平坦に加工され、その上に盛土をして墳丘を築いていることが判明した。地山直上には黒色土が全面に広がっており、この層からは弥生時代中期・後期の土器片が出土したことから周辺に弥生時代の遺構の存在が予想された。

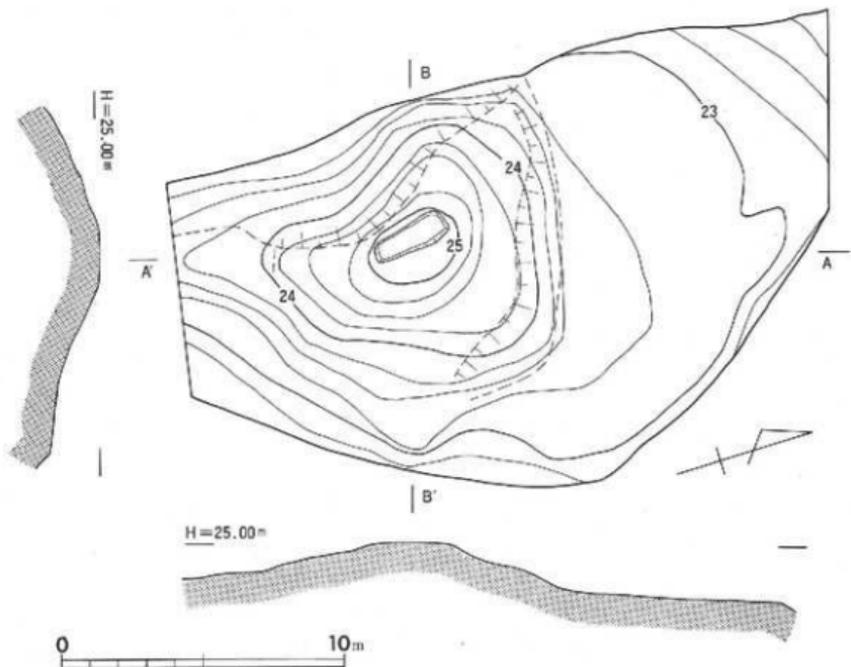
この作業を完了後、4号墳西側にトレンチを5カ所設定し4号墳周辺の本来の地形の把握に努めた。第3図に示した4号墳周辺の地形測量図は、二次堆積土を除去した後に測量したものである。

以上の作業を行い、平成4年9月25日すべての現地調査を完了した。

4. 検出遺構と遺物

八色谷古墳群の概要 (第3、4図)

八色谷古墳群は7基からなる古墳群で発掘調査は1～4号墳について行った。古墳は和久羅山から南北に伸びるなだらかな丘陵上に立地する。この丘陵は頂部が比較的平坦で基部から先端まで緩やかな傾斜が続いている。古墳はこのような丘陵の頂部および頂部に近い斜面にある。1号墳は10m×11mの方墳、2号墳と3号墳は隣接し2号墳と1号墳は約15mの間をあけてつくられている。4号墳は9×9mの方墳で2号墳から15m南西にあり丘陵頂部からやや下がった西斜面にある。5～7号墳は1号墳から北東に70m離れ小さな谷を挟んでいる。発掘調査していないがすべて方墳と思われ、いずれも一辺10m未満の小規模墳である。5号墳と6号墳は丘陵上に立地し両者の距離は



第5図 八色谷1号墳墳丘測量図 1:200

約25mを測り7号墳はこれらから南方に少し離れた斜面にある。5、6号墳の墳頂部には大きな穴があり須恵器が出土したという言い伝えがある。

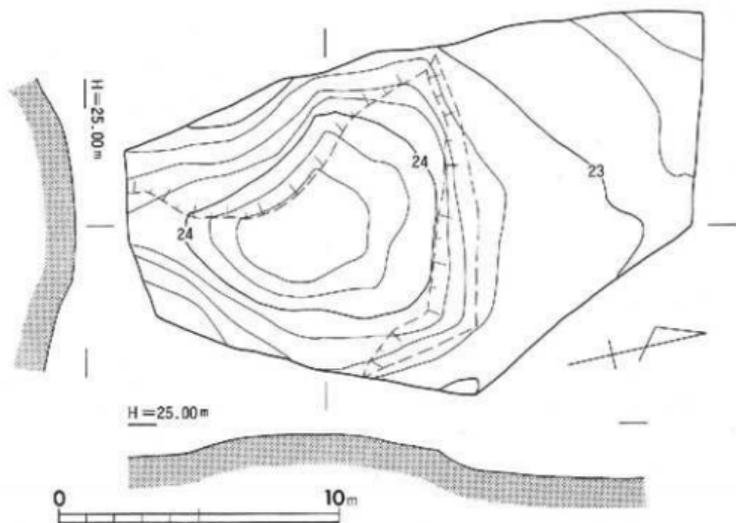
各古墳の配置を見ると、八色谷古墳群は1～4号墳と5～7号墳の2支群に分かれるかもしれない。ただし、両支群の間にある小さな谷は開墾によって大きく掘削されていることから、ここに古墳がなかったという証拠はない。現在存在する古墳群の構成が見かけのものである可能性もある。

(1) 1 号 墳

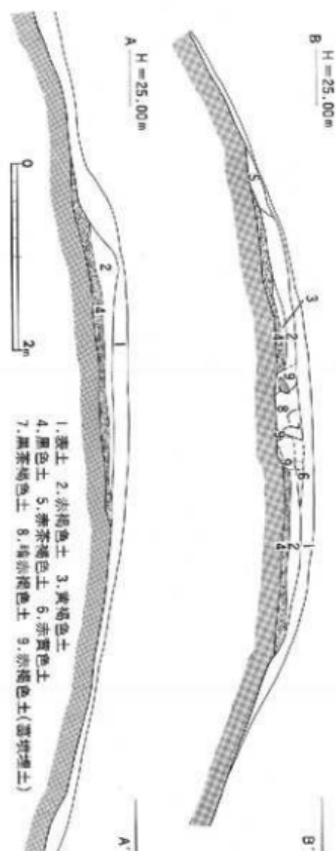
1号墳は丘陵頂部に立地する。その北側には広い谷を見下ろすことができ、この古墳は、北側の谷を意識してつくられたと思われる。墳丘の頂部の標高は、25.00mを測る。

墳丘（第5、6図、図版3、4） 測量前には一辺10m、高さ2mの方墳状を呈していたが、測量の結果、墳丘の北側は後世の開墾により、西、南側は山道によって大きく改変されており、実際には1号墳は一辺8m、高さ1.5mの小古墳であることが推定された。

墳丘の大きさは墳裾が削られているため明確ではない。南側の墳裾が一部残っていたことから南側墳裾を主体部を中心に折り返して墳丘を復元すると南北約10mとなる。東西方向も同じように東側の墳裾を主体部を中心に折り返して復元すると11mになる。墳形は南側の墳裾と東側の等高線が



第6図 八色谷1号墳墳丘測量図（盛土除去後） 1:200



第7図 八色谷1号墳墳丘土層図 1:60

底面はほぼ水平であり、墓域は盛土上面で平面形を確認し、少なくとも赤褐色土（第7層）上面から掘り込まれていることがわかる（図版15）。しかし、墓域埋土後、その上にさらに盛土をしたか否かについては、上の土が流出しているとも考えられるため、調査時には確認できなかった。棺は墓域のほぼ中央で検出された。その長さは上端が2.00m、下端が1.75m、幅は上端が南側で64cm、北側で50cm、下端が南側で52cm、北側で35cmを測る。

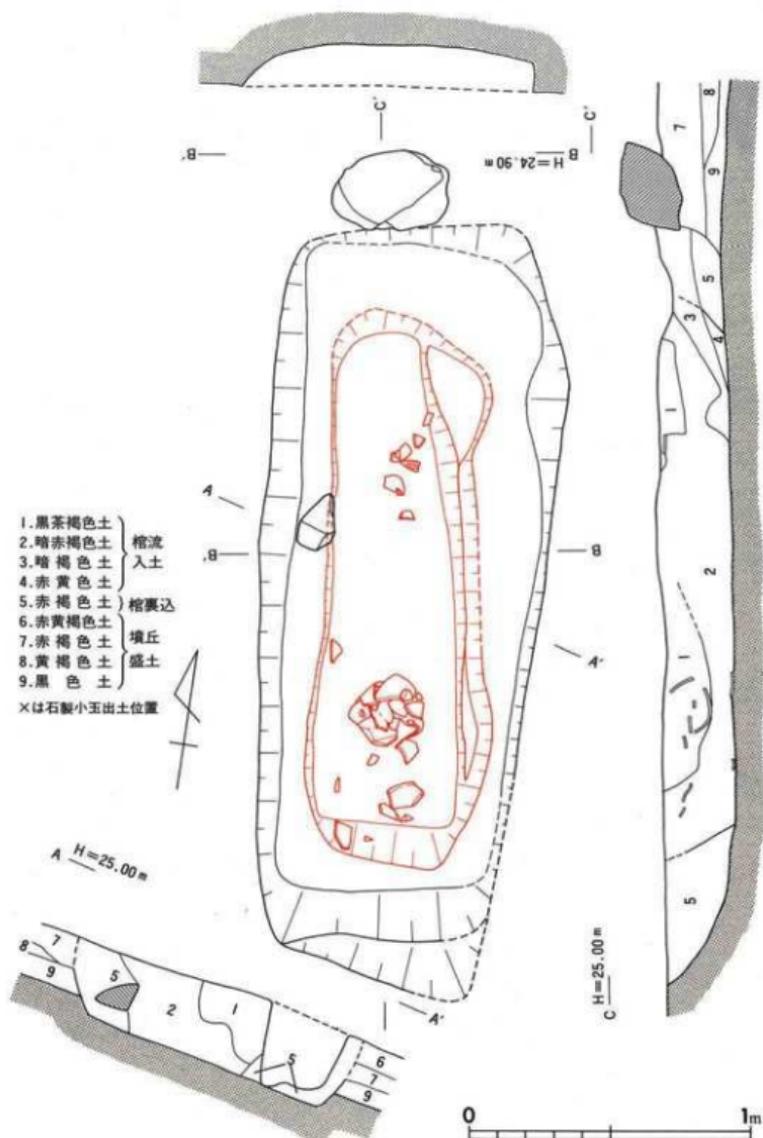
直線状を呈していることから方墳に復元した。墳頂部には4m四方の不整形の平坦面をもつ。葺石や周溝は認められなかった。

土層（第7図、図版7） 墳丘は地山を加工し、北側部分に盛土を行ってつくられている。基本的な層位は地山（赤褐色土）、黒色土（いわゆるブラック・バンド）、赤褐色土（盛土）である。盛土は古墳の周辺の地山と非常によく似た土である。南北軸の土層は地山が北側に向かって低くなっているの、盛土は墳頂南部分にはなく北に向かうにしたがって厚く盛られている。盛土は全体に薄く、もっとも厚いところでも35cmほどである。東西軸の土層は全体に20~30cmほどの厚さで水平に盛土している。黒色土は南北5m、東西6mの範囲にあるが不整形を呈し地山の傾斜に沿って確認された。

なお、墳丘の北西斜面には安山岩質の石が7個ほど盛土中に存在した。石は10~30cmほどの大きさに2~3個が1つのまとまりとなり3ヶ所にわかれていたが、そのあり方や少量であることから古墳の葺石とは考えられず、この石の性格や古墳との関連は不明である。

主体部（第8図、図版6） 墳頂部平坦面のほぼ中心に墓域があり、主体部は木棺直葬である。その主軸はN-11°-Wで、ほぼ南北方向である。

墓域は地山まで達しており長さ2.70m、幅1.08mの長方形を呈し、検出面からの深さは28cmを測る。

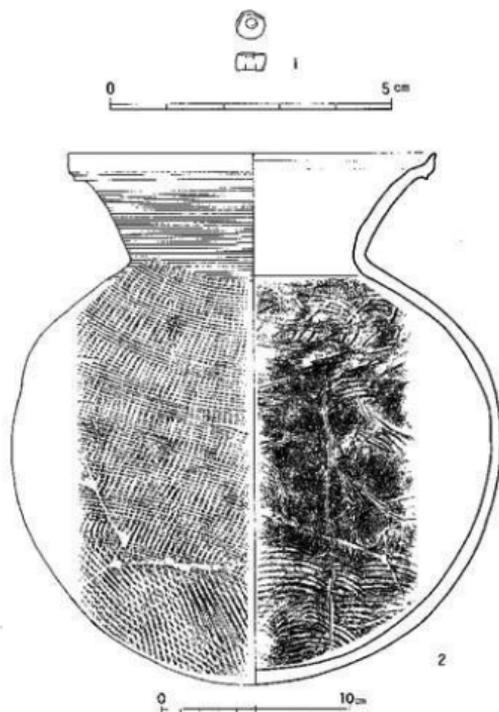


第8图 八色谷1号墳主体部実測图 1:20

棺の裏込め土である赤褐色土（第5層）を発掘したところ棺の四側長側壁の中央部分で長さ20cm、幅15cmの安山岩質の石が1個検出された（図版6）。この石は棺内流入土（暗赤褐色土、第2層）と裏込め土（赤褐色土、第5層）の境に棺長側壁に接して置かれていたことから、棺を固定するものと思われる。

また、調査前の地表観察時から長さ45cm、幅30cm、厚さ20cmの上面が平坦な石があった。調査の結果、この石は墓域外にあるが墓域の北側短側壁に接していることがわかった（図版6）。これは盛上上面にあるが、上層の観察からは古墳築造時に置かれたものかどうかを確認することはできなかった。

出土遺物は須恵器甕、石製小玉が各1点出土したに過ぎない。須恵器甕は棺の中央やや南寄りの地点で底面から約10cm浮いた状態で出土した（図版5、6）。この土器より下位にある暗赤褐色土



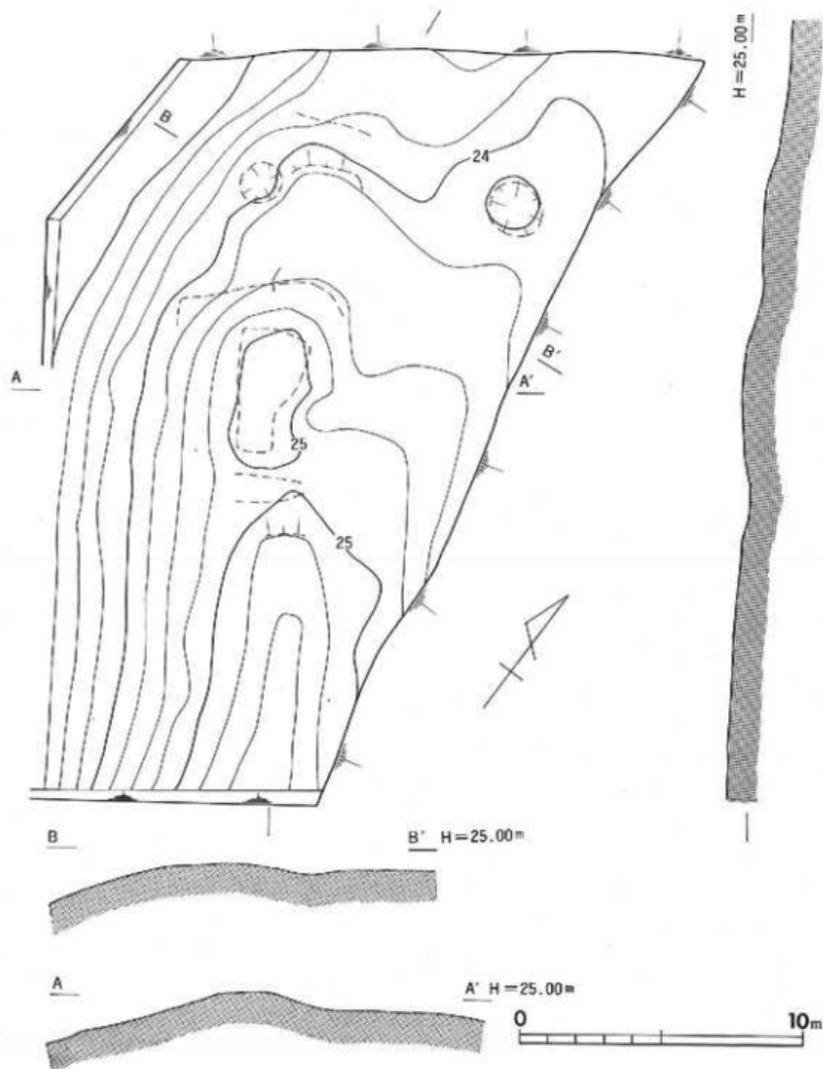
第9図 八色谷1号墳主体部出土玉(1) 1:1

須恵器(2) 1:3

（第2層）は棺内流入土と考えられ、出土レベルを併せて考えるなら、この須恵器甕は桶蓋の上に置かれていたものと考えられる。石製小玉は棺底のほぼ中央で出土した。

出土遺物（第9図） 須恵器甕1個が主体部棺上面から、小玉1個が棺内から出土している。須恵器甕は棺上面に置かれていたものと考えられる。

須恵器甕（第9図2）は、口径20.6cm、器高28.1cmを測る、中型の甕である。頸部が強く締まり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は上外方に繰り上がり、下端部に鋭い突縁が廻っている。胴部は球形で、最大径はほぼ中央にある。底部は丸底である。調整は頸部外面にカキ目、胴部外面に平行叩き後にカキ目、胴部内面に同心円当



第10图 八色谷2·3号墳地形測量图 1:200

て具痕を粗い面で調整で消去されている。この壘は口縁下端部に突縁が廻ることや、胴部が球形であることなどから、山陰の須恵器編年の第1期に相当すると考えられる。

小玉(第9図1)は径5mm、長さ3mmを測る。上面および下面は非常にいねいに研磨されるが、側縁はあまりにいねいに研磨されておらず、粗い研磨痕が観察される。また、側縁のところどころに鈍い稜線が残っている。灰色を呈し、滑石質と思われる。

(2) 2 号 墳 (第10図、図版8~11)

1号墳と同様、尾根上に位置し、現存墳丘で標高25.00mである。調査前の測量では7m×6mを測り、北および南側の墳裾が直線状になっていたため方墳と判断した。南側の尾根には上幅2m、下幅1mの切削溝と考えられる凹みがあった。調査の結果、確實な主体部、墳裾および溝は検出できなかった。上層観察では溝は明確ではなく、表上下が赤褐色土や黄褐色土の地山であった。墳丘も表上の下はすぐに地山で盛土はなかった。このように2号墳は積極的に古墳とすべき根拠が欠けるが墳丘状の高まりは自然のものとは考えられず、人工的な遺構と思われる。地山削り出しによる古墳と考えられる。なお、墳頂部の表土面に20cmほどの安山岩質の石材が4個まとまって存在したが、古墳との関係は不明である。なお、南斜面で、円形の土塊が検出され、その中から獣骨および炭火物が出土した。しかし、これは古墳に伴うものとは考えられず近年に家畜を葬ったものと思われる。

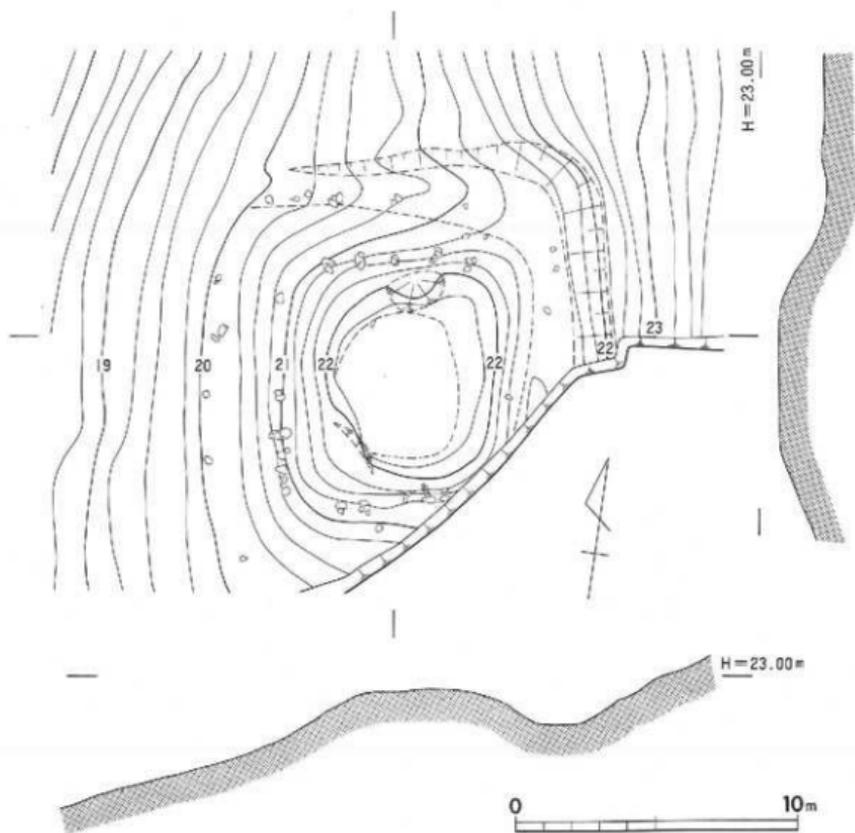
(3) 3 号 墳 (第10図、図版10、11)

2号墳の北側に接するように4m×4mの平坦面が検出され、人工的に加工されたものと思われる。北側の墳裾と考えられる傾斜変換点が直線になることなどから土壘の存在が想定された。東側は後世の山道で削られ、また、西側は木の根などで穴があくなど原地形は著しく改變していた。調査の結果、主体部は検出できなかったが地山削り出しの古墳と思われる。

(4) 4 号 墳 (第11~21図、図版12~30)

南北に伸びる丘陵が少し南西に張り出した緩斜面に位置し、墳頂部での標高は22.50mを測る。調査前は近年の埋め立てによりほぼ完全に埋没していたが(図版12)、厚さ1~1.5mの二次堆積土を除去した結果、一辺9m、高さ1.5mの方墳で墳丘斜面には3方向に墓石があるなど残存状態が良好な古墳であることが判明した。

墳丘(第11、12図、図版12~14) 発掘前には一辺12mの方墳で東側から北側にかけて幅4mの周溝が存在した。調査の結果、墳丘は南北9m、東西9m、高さは東側で1.25m、西側で1.5mの



第11図 八色谷4号墳墳丘測量図 1:200

規模で、墳頂部には南北5m、東西4mの平坦面があった。

北側の墳裾は葦石の基底石を結ぶ線と考えたがその石の外側にも傾斜が続き傾斜変換点は周溝内にある(図版14)。第11図ではこの傾斜変換点を点線で表わした。そのため周溝は西端で幅2mほどに狭まっているように見える。西および南側でも傾斜変換点は葦石最下段より1~2m下である。発掘前にはこの変換点を墳裾と考えたので、墳丘規模は12mを測っていたが、調査後では南北9m、東西9mとした。この傾斜変換点は葦石の下にあって、見かけの墳裾は実際の墳裾より下にみられ、ここから測ると西側で高さ2mを測ることから見かけ以上に高くしっかりした古墳に見える。

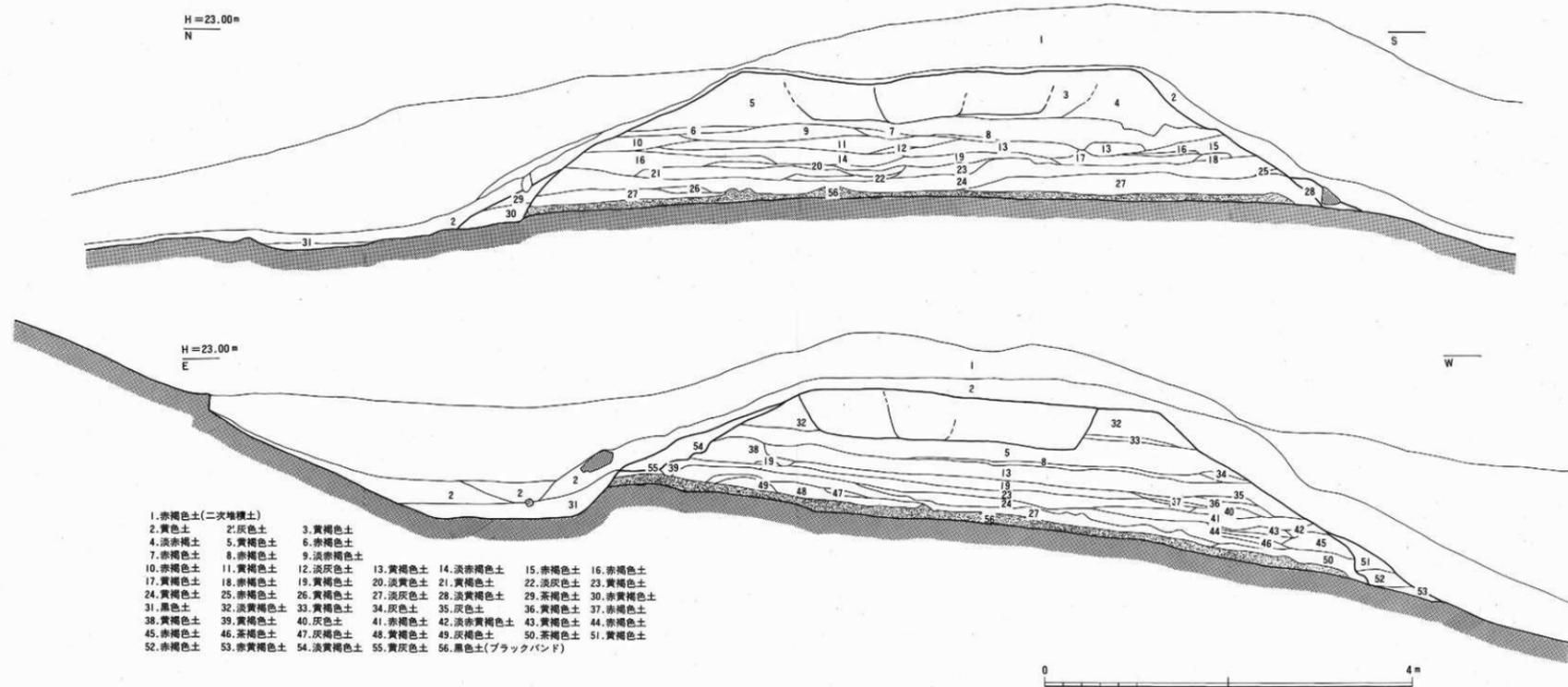


第12図 八色谷4号墳丘測量図（盛土除去後） 1：200

4号墳は立地が丘陵斜面にあること、墳丘の大きさに比して腰高であることなど、他の古墳と大きく様相が異なっている。1～3号墳が丘陵頂部に立地し東側の低地を見下ろすのに対し、4号墳は西方面を意識してつくられたと思われる。

なお、南西斜面は調査区外のため発掘調査は行っていない。

周溝（図版14、20、21） 周溝は東側（丘陵側）と北側で検出されたが西側（谷側）では検出されなかった。なお、南側は調査区外のため発掘調査を行っていない。周溝は西側で検出されなかったことから、北・東・南の三方を「コ」の字形に廻ると考えられる。その規模は上端で東側（丘陵側）幅3m、北側幅2mを測り、溝底は東側では幅1.5mの平坦であるが、北側は緩やかな凹面である。土層は東側で10cm、北側で5cmほど黒色土（第31層）が堆積し、その上に二次堆積土が堆積



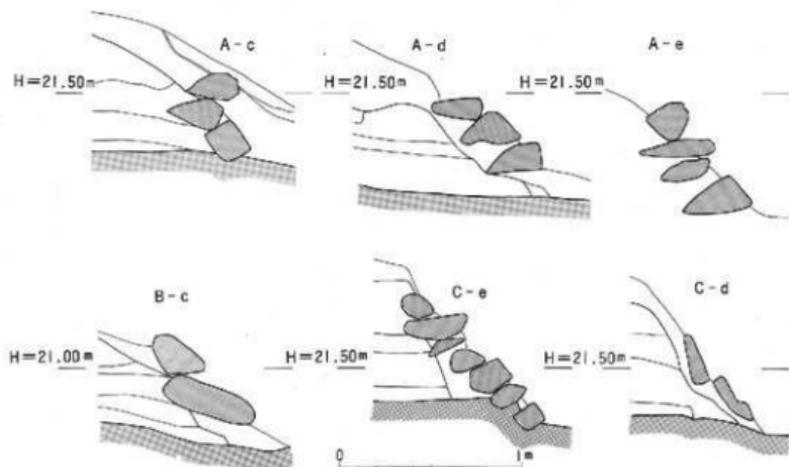
第13图 八色谷4号墳墳丘土層図 1:40

する前の表土がある。

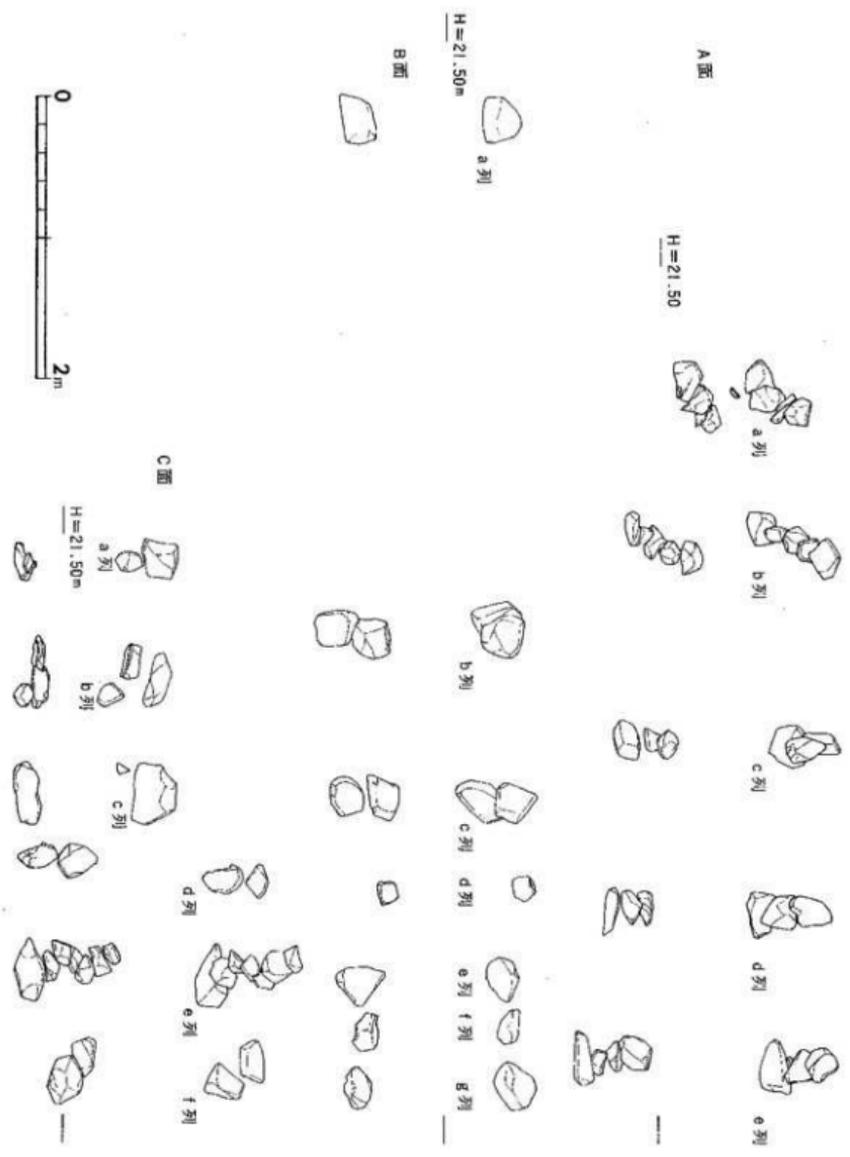
周溝の北東コーナーからは浅い土壌が検出された。この土壌は上端で1.53m×1.15mを測る不整形楕円形を呈し、深さは東側で35cm、西側では5cmを測り底面は周溝の底のレベルとほぼ同じである。この土壌からは須恵器甕が出土した。北側の周溝内からは、子持甕1、土師器高環3、甕1が出土した。子持甕は土壌から少し離れた位置に横転した状態で、高環や甕はそれからさらに下方に離れて出土した。また、周溝内からは葦石の転石と思われる石が10数個散在していた。

土層（第13図、図版24、25） 墳丘は大部分が盛土で作られ、盛土の厚さは厚い部分で約1.5mを測る。盛土は多くが赤褐色土や黄褐色土で古墳周辺の土を用いたと思われる。基本的な層位は地山の上に黒色土（第56層、いわゆるブラック・バンド）が全面にあり、その上に赤褐色土や黄褐色土が盛られ、墳丘を形成している。最下層の黒色土層は地山整形面と同様の傾斜で堆積しているが、それから上の層は水平になるように積まれている。黒色土以外の盛土は上半が赤褐色土や黄褐色土など同色系の土であるが下半はこれらの土のほかに淡灰色土などが互層状に堆積している。

墳丘の築造は基本的には上述のように土を水平に盛っているが、墳裾では墳丘傾斜に沿って傾斜している層（第28～30、51～55層）が観察された（図版17）。これは第3層～50層（第28層～30層を除く）で墳丘の大体の形をつくり、葦石を配置した後さらに第28層～30層や第51層～55層で整形または葦石の補強を行ったことを示していると考えられる。



第14図 八色谷4号墳葦石断面図 1:30



第15圖 八色谷 4 号墳基石炭源圖 1:40

墓石(第14、15図、図版12~17) 墳丘の北、西、南斜面には墓石が認められた。便宜上、北斜面をA面、西斜面をB面、南斜面をC面とし、各列はそれぞれ面に向かって左よりa、b、c…と呼称する。墳丘全面を覆うものではなく、A面およびC面では垂直方向に3~6段に積まれた石列が約1m間隔で配置され、B面では基底部とそれに近い石が一部隣接して並んでいた。土層観察では墳丘斜面を掘り込んだ形跡はなく第3層~50層(第28層~30層を除く)を積み上げた後に墓石を並べ、さらに第28層~30層や第51層~55層を盛って墳丘を完成させているように思われる。いずれも基本的には基底に30~40cmの石を置き、その上に20cm程度の石を積み上げている。

A面ではa~e列5列が検出された。それぞれは1.1~1.3mの間隔で配されもっとも残りのよいa、b列では5個、もっとも残りの悪いc列は上部の石材は原状に近く3個の石が残るにとどまる。

B面ではa~g列の7列が残っているが、残存状態は悪く大部分は基底部の石が1個残るだけかせいぜい2段が残る程度である。B面の墓石はそれぞれの間隔が広いA面、C面と違い、各列が密接している。

C面ではa~f列の6列が残る。a~c列は基底から1~2段の石が残るだけだがd~f列は2~7段の石が積まれている。d~f列はA面同様、0.6m~0.8mの間隔をあけて配されているがa~d列はその間隔が0.3~0.4mとA面に比して狭い。

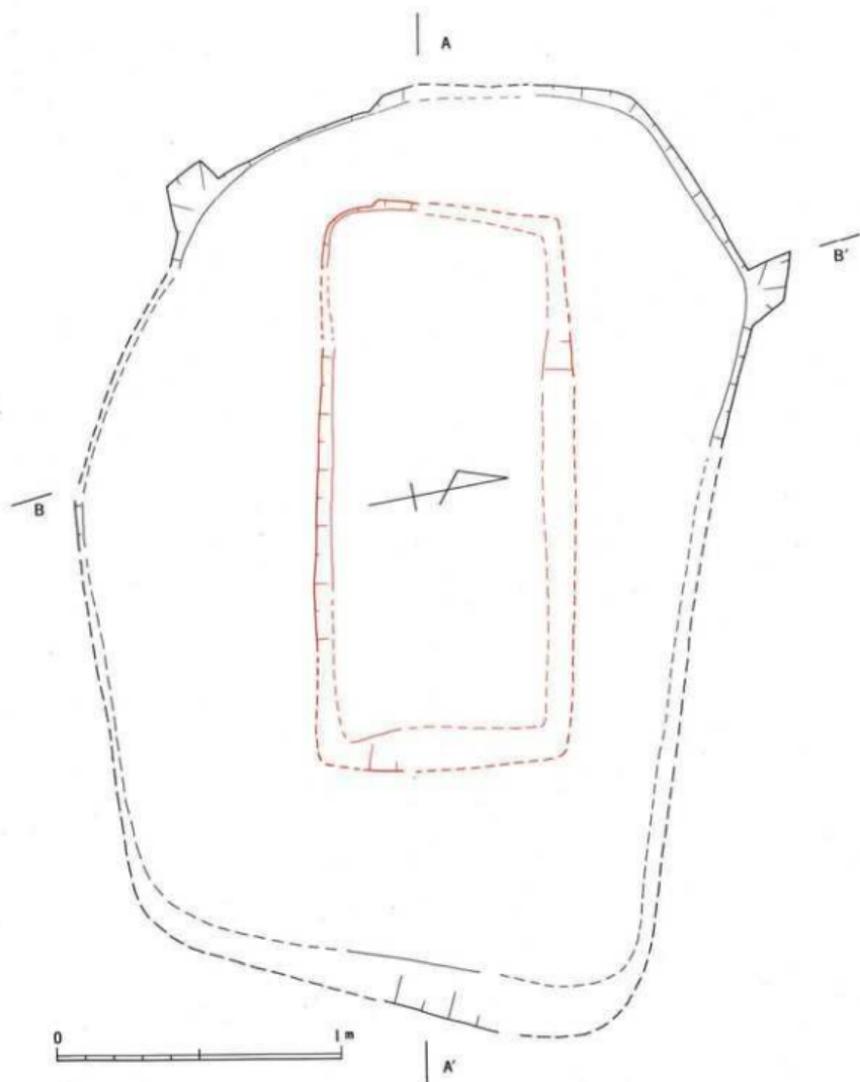
A面とC面では各列が1m前後の間隔をあけて積まれているが、各石列の間には全く石は認められなかった。墓石は墳丘斜面全面にあるのが一般的であるが、4号墳のA面、C面では墓石が剥落した痕跡はなく(図版14)、また、周溝内にも全面を覆うほどの石の量はないことから、これらの墓石は築造当初に近い状態であると考えられる。

B面については、古墳下方に続く丘陵の傾斜が急であったようで、c~g列が密接していることから全面に墓石があった可能性も否定できない(図版16)。しかし、下方斜面の調査では石は出さず、B面に石が剥落した痕跡もないことから、やはり、B面も現状が築造当時に近い状態であろうか。B面とA面、C面との墓石の様相が異なることが気になるところである。

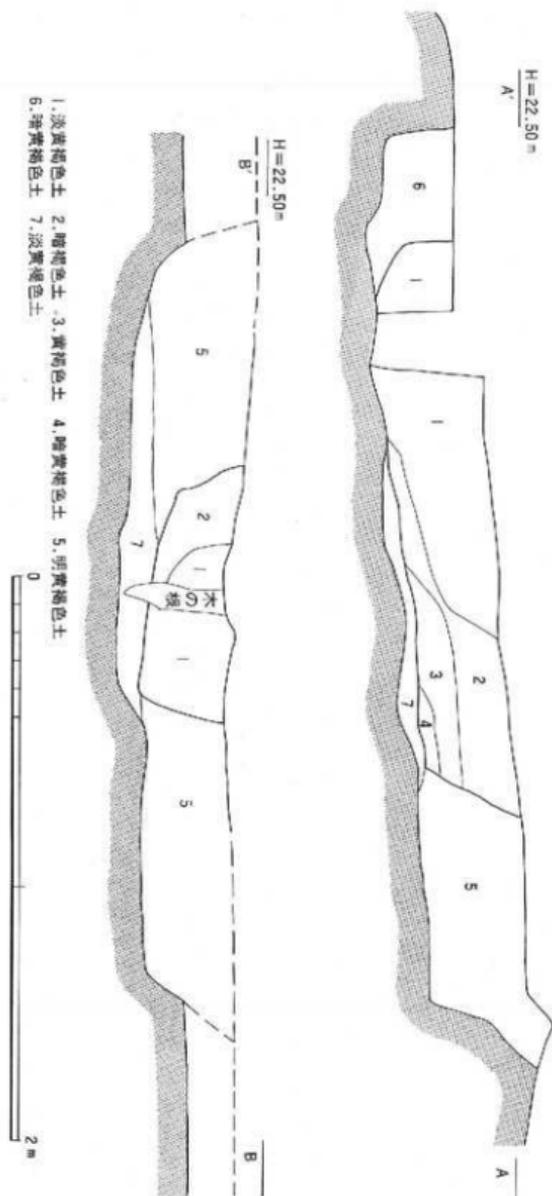
墓石はすべてやや赤みを帯びており和久羅山や嵩山周辺で産する安山岩質の石とよく似る。

主体部(第16、17図、図版18、19) 墳頂平坦面のはほぼ中央に位置している。主体部は墳丘頂部から掘り込まれているようだが、墳丘の盛土と非常によく似た土質であったため、検出できたのは底近くの一部であった。土層の観察によるとこれは木棺直葬で(図版19)、墓塚は長さ3.25m、幅2.2mの楕円形、棺は2.0m×0.9mの長方形を呈し深さは断面観察によれば40cmを測る。主軸はN-79°-Wでありほぼ東西方向を指し、墳丘主軸にはほぼ平行である。頭位は不明である。

墓塚に棺床上である第7層を一部にひき、その上に棺を置き第5、6層の明黄褐色土で棺を埋め



第16図 八色谷4号墳主体部実測図 1:20



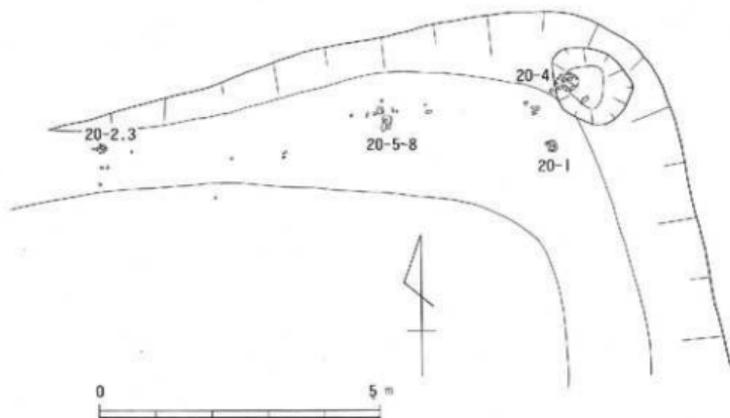
第17図 八色谷4号墳主体部土層図 1:20

ていた。

棺材や遺物はなかったが、床面から黄褐色の4cm程度の自然石が1個出土した。古墳に関係するかどうかは不明である。

整地面の状況(図版26、27) 墳丘は、山腹斜面をカットし9×8.5mの範囲を方形に地山整形して平坦面をつくり、その上に盛土して築造されている。この整地面は丘陵斜面の傾斜に沿って整形され、東側が高く、西側が低くなっている。整地面上面は周溝底から約30cm高くなっている。

遺物出土状態(第18、19、21図) 周溝内の土壌から出土した甕は底面に接して置かれており、土圧により上半部が甕の中に落ち込んだ状態で出土したがほとんど完形に復元できた。甕から1.1m離れた周溝内から子持甕が倒れて出土した。破片はまとまっていたが、子壺1個と親器の頸部がなかった。また、周溝の

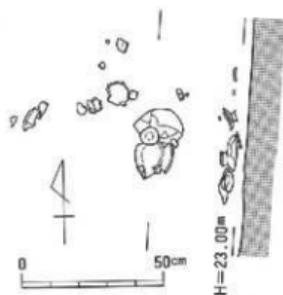


第18図 八色谷4号墳周溝内遺物出土状態実測図 1:100

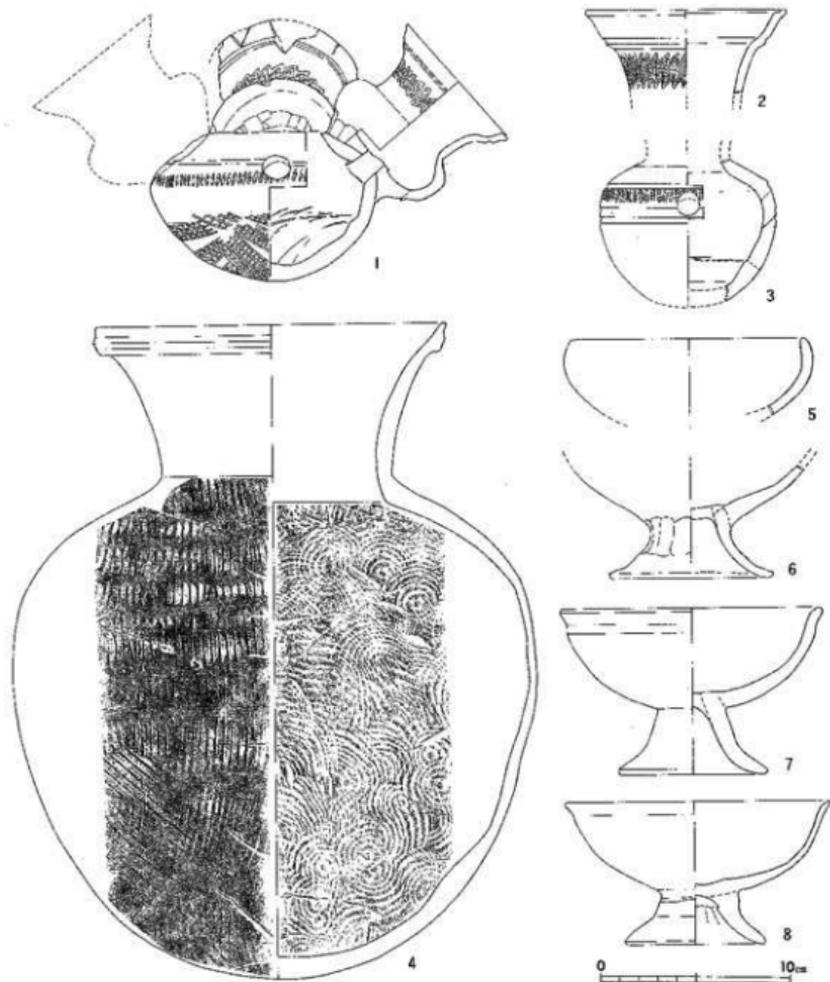
ば底面から土師器の高環が3個体まとも出土した。風化が激しく、小片となっていた。周溝の西端で須恵器の甕が小片となり検出された。

出土遺物(第20図、図版28~30) 北側周溝内から、須恵器甕、同子持甕、同甕、土師器高環が出土している。これらは、いずれも地山直上で出土しており、この古墳に伴うものと考えてさしつかえないと思われる。

子持甕(第20図1)は、玉葱状の親器の肩部にやや大きめの子甕を3個配す。親器胴部最大径12cm、現存高13.8cmを測る。親器口頸部と子甕1個を欠損するが、頸部径は6cmとかなり太い。子甕は口径8cm、高さ7cmを測る。口縁部は臙状口縁で、口縁部上端は平坦面をなす。文様は子甕頸部に波状文、親器胴部に沈線文と櫛状工具による刺突文が施される。子甕の接合は、親器と子甕を別々に作った後に親器の肩部に子甕を接合し、さらに子甕と親器の肩部を竹管状工具で同時に穿孔している。子甕底部に手持ちへら削り調整が施され、親器底部外面には若干なで調整が施されるものの平行叩き痕が明瞭に残る。内面には不明瞭ながら同心円当て具痕が残り、同心円当て具痕を回転などで調整が消失していることがわかる。



第19図 八色谷4号墳周溝内遺物出土状態(土師器高環)実測図 1:20

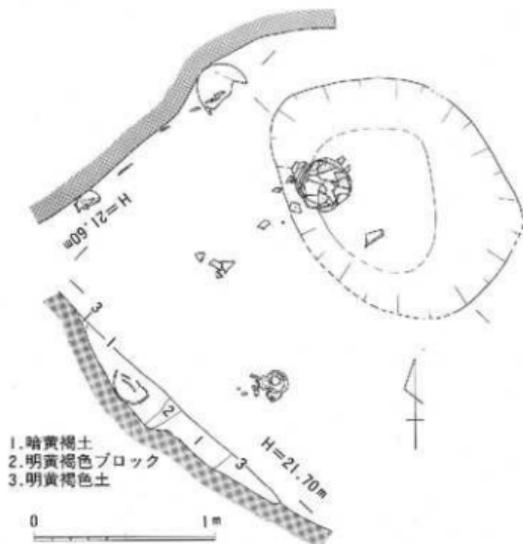


第20図 八色谷4号墳周溝内出土須恵器(1~4)、土師器(5~8) 1:3

甕(第20図2、3)は胎土、焼成などがよく似ることから同一個体と考えられる。口径10.6cm、胴部最大径9.2cmを測り、口径が胴部最大径を凌ぐ。頸部下端の径は4.4cmと小さく、両者は直接接合できないが口縁部が大きくラップ状に開く形態と考えられる。口縁端部は面を持ちわずかに凹面

をなすが、鋭さに欠ける。胴部はやや肩が張り気味だがほぼ球形をし、底部は丸底である。文様は頸部に波状文、胴部に沈線文とその間に櫛状工具による刺突文が施されている。調整はいずれも回転で調整が施され、とくに底部はいてねいである。そのため通常施される底部の回転へら削り調整の有無は不明である。

甕(第20図4)は口径18.4cm、高さ29.6cmを測る。口頸部は長く外反するが、1号墳出土の甕よりは強く外反しない。口縁端部は肥

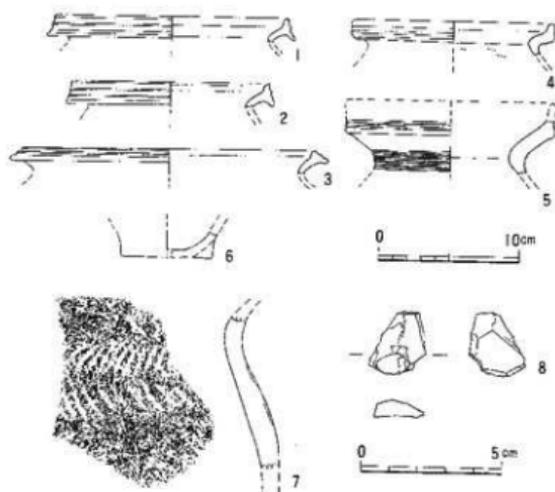


第21図 八色谷4号墳周溝内遺物出土状態(須恵器)実測図 1:30

厚し、突縁の名残りはあるものの非常に鈍い。胴部は長胴で最大径は上部にあり、やや肩の張った形態である。胴部は外面に粗い平行叩き目が、内面に同心円当て具痕がみられるが、両面ともカキ目によって部分的に消去しようとしている。

土師器高坏(第20図5~8)は、いずれも深身で碗形の坏部に低い脚部を付ける、やや特異な形態の高坏である。5・6は直接は接合できないが、同一個体と思われる。坏部口径12.2~14cm、全高は7が8.8cm、8が7.5cmを測る。坏部はいずれも深身で、5の口縁部端部が内湾するが7・8は外反する。脚部は、ラッパ状に大きく開く形態で、脚高2.9~3.5cmに対し脚端径7.4~7.8cmと高坏脚部としては非常に低い。脚部の接合方法は6がよくわかる。これは底部に穴があいた坏部に脚部を差し込み、さらに坏底部に粘土を充填している。7は接合面がはっきりしないが、坏部と脚部の接合部分で円形に破損していることから6と同様の接合方法かもしれない。8は接合の痕跡が不明瞭だが、6・7と違い底のある坏部をそのまま脚部に接合しているようである。脚部内面上部には下方から粘土を引き伸ばすようにしているが、これはこの部分が剥脱しないための調整と思われる。

以上の出土土器のうち、1については山陰地方の須恵器編年第Ⅰ期に相当すると思われるが、3



は頸部が細く胴部が球形であること、4は口縁端部が肥厚し突縁が鈍いことや長胴であることなどから、ともに第Ⅱ期と考えられる。上器器高環については積極的に年代を求めることはできないが、1～4の年代と矛盾するものではないと考える。

第22図 墳丘盛土内出土の遺物（1～6・8 4号墳、7 1号墳）

1～6 1:4、7・8 1:2

(5) 1号墳・4号墳盛土内の遺物

1号墳および4号墳の盛土内からは、弥生土器片、黒曜石剥片が出土した。(第22図、図版30)

第22図1～5は弥生土器で、いずれも頸部がくの字形に強く短く屈曲した甕である。1～3は口縁端部が上下または下方に拡張したもので口縁端部は内傾している。口縁端部には凹線文が2条から3条施されている。4は口縁端部が上方に繰り上がったもので、頸部以下にはへら削り調整が施されている。口縁端部には凹線文が2条施されている。5は頸部がやや長く伸び、口縁端部は上方に長く伸びると思われる。口縁端部と頸部に櫛状工具による平行沈線文が施されている。7は肩部小片で、貝殻腹縁による羽状文が施されている。6は平底の底部で、内面にはへら削り調整はみられない。8は黒曜石製の剥片である。2次加工痕および使用痕はみられない。

これらの弥生土器は、1～3が中期後葉、4が後期前半、5・7が後期後半と思われる。6はへら削りがみられないことから中期中葉にさかのぼるかもしれない。

5. 小 結

以上、八色谷古墳群の調査結果について述べてきた。

八色谷古墳群は、調査の結果古墳時代中期の初期群集墳であることが判明した。従来からこの時期の群集墳は丘陵頂部に立地することが指摘されてきた。八色谷古墳群でも概ね丘陵頂部に立地しており、一般的な初期群集墳の様相と大きく変わるものではない。しかし、4号墳については丘陵斜面に築造され、この時期の古墳としては立地のうえで特異と言える。この丘陵の頂部には1～3号墳が作られているが、4号墳を築造するほどの面積は残されており、なぜ無理に斜面に築造しなければならなかったか疑問である。4号墳と同様に余地がありながら斜面に築かれた同時代の古墳としては松江市長砂11号墳⁽¹¹⁾があるが、古墳の築造、選地に当って、何らかの規制があったのであろうか。後期古墳では「山寄せ」の古墳として斜面に立地するものが多く、造墓地が丘陵上から斜面へと移行する過渡的な古墳と見ることもできるかもしれない。しかし、須恵器第Ⅱ期の古墳の様相が今一つ明らかになっていないため、これについても想像の域を出ない。

4号墳は立地以外でも盛土量の多いことと、それに伴って外観が腰高であること、葺石が特異であることなど、同時期と同規模の他の古墳と比べると特徴的な古墳である。特に、小規模墳で葺石を持つ古墳は今のところ出雲地方ではほとんど見られず、特異な古墳といえよう。また葺石の形状も前章で述べたとおり全面に葺かれていたとは考えにくく、椽状に積み上げられただけの特殊な葺石である。あえて似た葺石を探すとすれば、松江市古曾志町古曾志大谷1号墳⁽¹²⁾の葺石のうち椽椽状に配置されている葺石である。古曾志大谷1号墳ではその間に葺石が充填されているので、4号墳では充填されるべき葺石が省略されたと考えられるのかもしれない。いずれにしても4号墳の特異な点について指摘できても、その理由については考える材料を持たない。この古墳の系譜について今後の資料の増加が望まれる。

八色谷古墳群を構成する7基の古墳のうち、今回は4基の古墳について発掘調査を行った。部分的調査のため群全体の構造を明らかにすることはできなかったが、少なくとも1号墳築造（須恵器第Ⅰ期）後4号墳が築造（第Ⅱ期）されたことがわかった。須恵器の型式ではその差は1型式で、両者が時間的に隔絶したのではなく、言わば累代的に築造された古墳と考えられる。

川津・持田平野だけでなく、出雲地方では当古墳群のように数基の小古墳で構成される初期群集墳は各地に多く存在している。当地では、松江市大草町百塚山古墳群⁽¹³⁾、八束郡八雲村増福寺古墳群⁽¹⁴⁾、同郡鹿島町奥才古墳群⁽¹⁵⁾などのように数十基から百基を越す大群集墳もあるが、大多数は十基前後の小群集墳である。八色谷古墳群もこのような小群集墳の一つであり、川津・持田平野の一角に

当時生活していた有力層の奥津城であったと考えられる。この地域の他の古墳と比較して、墳丘規模、主体部、副葬品などいずれも卓越した要素はなく、ごく一般的な古墳群である。周辺を見渡すと、北東の谷を挟んだ丘陵にある中尾古墳⁽²⁷⁾(方墳、21m)がこの地区では卓越した古墳である。中尾古墳は時期は定かではないが、古墳が無秩序に築造されたのではないことを前提とすると、両者は当時の社会構造の一端を表しているのかもしれない。

古墳の築造方法は、4号墳が比較的わかりやすい。4号墳の築造工程を再度まとめると、以下の順序で築造されたと考えられる。

- (1) 丘陵斜面を掘削して、平坦面と周溝を削り出す(平坦面と周溝の前後関係は不明)
- (2) 平坦面の傾斜に沿って黒色土(第56層)が堆積する
- (3) その上に水平に盛土(第3層~第27層、第31層~第50層)をしておおよその形を作る
- (4) その斜面に葎石を置く
- (5) さらに墳丘斜面に第28層~第30層と第51層~第55層を貼りつけ、葎石の補強及び墳丘の整形をする
- (6) 墓壇を掘り込む
- (7) 棺を入れ埋葬を行う

(7)の棺埋葬後、さらにその上に盛土をするかどうかは確認できなかったが、上記の順序で築造されたと考えられる。1号墳もやや違いはあるものの基本的には同様の築造方法と思われる。

ここで問題となるのが(2)の黒色土の堆積である。地山の直上にこの層が堆積している古墳は多く、古墳を築く前の自然堆積土(旧表土)と考える研究者も多い。しかし、1号墳、4号墳とも地山整形の後にこの層が堆積していることから古墳築造前に丘陵上に自然堆積した土層とは考えにくい。1号墳は部分的に堆積しているので地山整形時の削り残しと見ることもできるが、4号墳は加工面全面に黒色土があること、自然丘陵の傾斜と黒色土の傾斜が違うことを考えると、やはり古墳築造による地山整形後の堆積と考えざるをえない。

次にこの黒色土層が自然堆積土であるか人為的堆積であるかが問題となる。人為的な堆積とするなら、古墳築造に当って多くがわざわざ黒色土を運んできたことになり、手間をかけて黒色土を盛る意味について説明が必要であろう。反対に、自然堆積とするなら地山整形後しばらく時間をおいてから盛土をしたことになる。これによると選地・整地と墳丘の築造が別時期と解釈することができる。ただし、整地時と墳丘築造の時期が明らかに違うことが分かる資料が出土しないかぎり説明は困難であろう。

この黒色土層については、多くの古墳で地山直上から検出されているにもかかわらず、納得のいく説明が成されたことはない。古墳を築造する過程で、重要な層と考えられるので、あえて想像を

遅くして、その成因の可能性を考えてみた。

出土遺物については同時期のはかの小規模墳同様あまり豊富ではない。この時期の小規模墳は4号墳同様、周溝で検出されるものが多いが、単一器種の出土がほとんどである。このような状況の中で4号墳は甕、甕、子持甕（須恵器）、高杯（土師器）と比較的多くの器種が出土しており、この時期の器種構成を知る上で重要である。

1号墳は須恵器甕と石製小土が出土しているが、甕の出土状態に特徴がある。この甕は木棺の直上におかれたと推定したが、この時期の古墳で棺上におかれた状態で遺物が出土した例は意外と少なく、当地方では安来市大坪3号墳^(M9)、松江市柴2号墳^(M9)などが知られる。しかし大坪3号墳にしても柴2号墳にしても棺上に破砕された状態で出土しており、八色谷1号墳のように完形で置かれていたのではない。1号墳は棺上に完形品を供献したことがわかる好例と言えよう。

出土遺物の中で特に注目できるのは子持甕である。子持甕は島根県内では八束郡八雲村増福寺20号墳^(M10)以来、2例目の出土で、全国的にみても出土数は多くないようである。増福寺20号墳は大型甕であるのに対し、八色谷4号墳では小型品である。両者は器形の大小があるものの、子壺やその口縁端部の様相、子壺の接合方法などよく似ている。全体の器形や子壺の口縁端部の特徴などから、両者は須恵器第Ⅰ期のものと考えられあまり時期差がないように思われる。ともに親甕は一般の甕と形態上違いはみられず、山陰地方以外で出土した子持甕との違いもあまりないようである。これは第Ⅰ期の段階では当地方の装飾付須恵器が地方色を持つ以前であることを示すと思われる。山田邦和氏によれば子持甕は陶色TK23からMT15型式間のもたとされているが、当地方の子持甕もこの枠からはずれるものではない^(M11)。一方、出雲および伯耆地方独特とされる親甕の底を省略する子持甕は第Ⅱ期のやや新しい段階から出現する（松江山海井原古墳^(M12)）。これから考えても子持甕が作られた段階は、まだ須恵器の強い地方色は現れていなかったのではないだろうか。

以上八色谷古墳群の発掘調査の成果をもとにまとめてみた。古墳時代中期のいわゆる初期群集墳は出雲地方では多く存在するが、その分析について試みられることは少なかった。群の構造、築造方法など不明な点は未だにあり、今後検討されるべき課題は多いと思われる。

注

1. 松江市教育委員会 『松江圏都市計画事業乃木上地区画整理事業区域埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 1983年
2. 山本清 『山陰の須恵器』 『山陰の古墳文化の研究』 1971年
3. 島根県教育委員会 『古墳志遺跡群発掘調査報告書』 1989年
4. 門脇俊彦 『百塚山古墳群』 『島根県人百事典』 山陰中央新報社 1982年
5. 八雲村教育委員会 『増福寺古墳群発掘調査報告書』 1981年
八雲村教育委員会 『増福寺古墳群発掘調査報告書』 1982年

6. 鹿島町教育委員会 「奥才古墳群」 1985年
7. 鳥根大学考古学研究会 「菅田考古」15号 1979年
8. 鳥根県教育委員会 「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書」I 1976年
9. 松江市教育委員会 「柴古墳群」1985年
10. 注(5)と同じ
11. 山田邦和 「裝飾付須恵器の分類と編年(上)(下)」『古代文化』41-8, 9 1989年
12. 鳥根県教育委員会 「薄井原古墳調査報告書」 1962年

圖 版



八色谷古墳群遠景（北方上空から和久羅山方面を望む）



八色谷古墳群遠景（西方上空から）



八色谷古墳群遠景（東から）



八色谷古墳群遠景（西から）



1号墳調査前の状況（南から）



1号墳表土除去後の状況



1号墳全景（南から）



1号墳主体部棺内第1層除去後の状況（南から）



1号墳主体部土層堆積状況



1号墳須恵器壺出土状況



1号墳須恵器壺出土状況（北から）



1号墳主体部(棺)検出状況



1号墳墓壇検出状況



1号墳墳丘土層堆積状況（東西方向）



同上（南北方向）



1号墳盛土除去後の状況（北から）



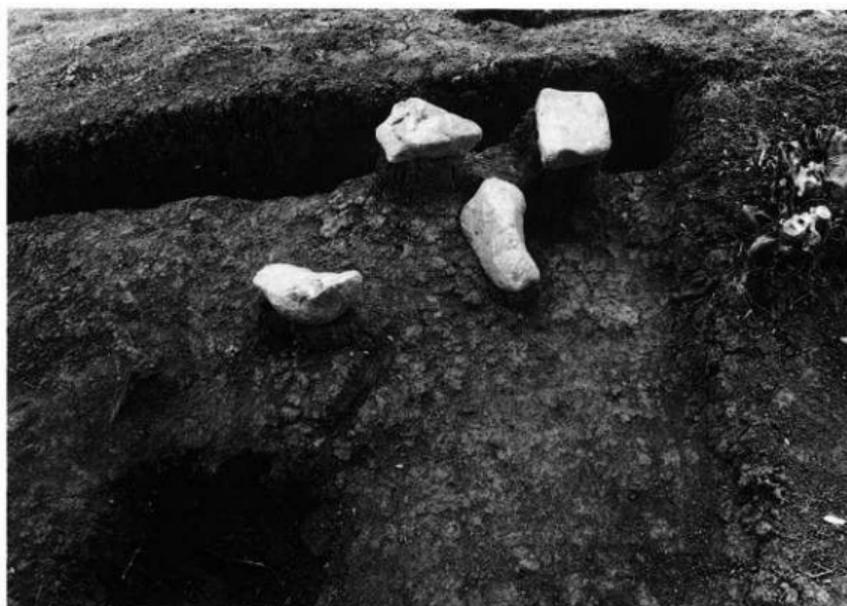
2・3号墳調査前の状況



2・3号墳調査後の状況



2号墳墳丘完掘後の状況



2号墳墳頂部石材出土状況



3号墳発掘後の状況



2・3号墳全景（調査後）



2・3号墳調査風景



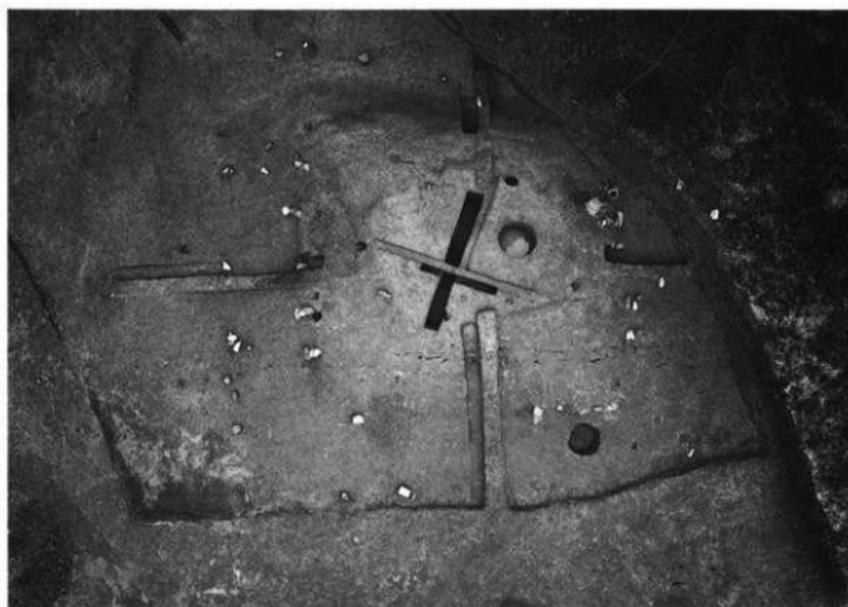
4号墳二次堆積土除去後の状況（北から）



4号墳全景（北西から）



4号墳全景（北東から）



4号墳全景



4号墳墓石検出状況（A面）



4号墳A面の墓石（西から）



4号墳葺石検出状況（B、C面）



4号墳葺石（A面左からa、b、c列）



4号墳基石 (B面左からc、d、e、f、g列)



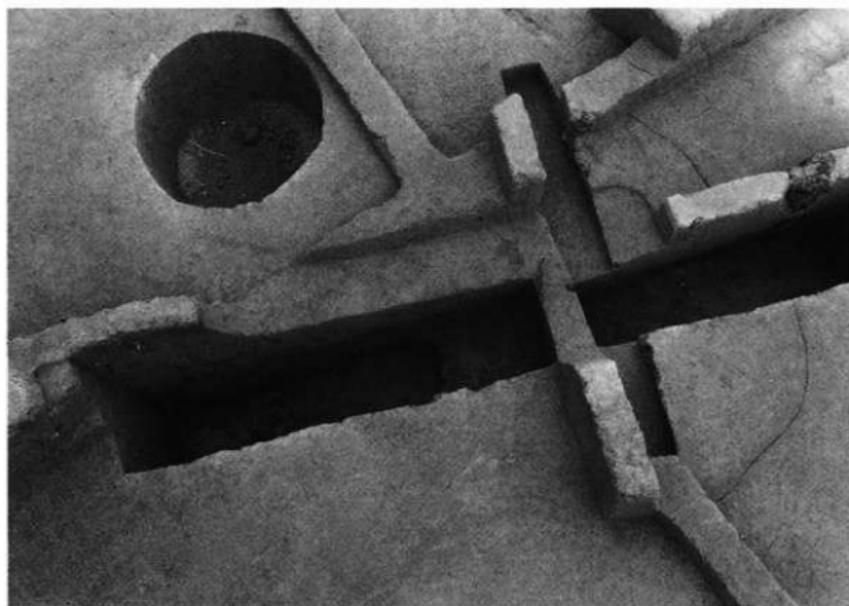
4号墳基石 (C面左からb、d、e、f列)



4号墳蓋石細部と墳裾の土層（A面c列）



同 上 （B面c列）



4号墳主体部(棺)検出状況



4号墳墓墳検出状況



4号墳主体部土層堆積状況（南北方向）



同上（東西方向）



4号墳東周溝



4号墳北周溝



4号墳東周溝内土層堆積状況



4号墳北周溝内土層堆積状況



4号墳須惠器壁出土状況



4号墳須惠器子持器出土状況

4号墳土師器
高坏出土状況



4号墳須惠器甕出土状況





4号墩丘土層堆積狀況(東西方向)



同上(南北方向)